５ミミコの独立（山之口 貘）

　　　ミミコの独立 山之口　貘

１　とうちゃんのなんか

２　はくんじゃないぞ

３　ぼくは①その場を見て言ったが

４　とうちゃんのなんか

５　はかないよ

６　とうちゃんのんこをかりてって

７　ミミコのかんこ

８　はくんだ　と言うのだ

９　こんな理屈をこねてみせながら

10　ミミコは小さなそのあんよで

11　まな板みたいな下駄をひきずって行った

12　土間では片隅の

13　ますの上に

14②赤い鼻緒の

15　赤いかんこが

16　かぼちゃと並んで待っていた

（『に』所収）

　詩の中に「［　　　Ⅰ　　　］」とか「かぼちゃと並んで」とかあることから判断して、多分、詩人の一家が茨城県の妻の実家に開中に書かれたものであろう。「とうちゃんの下駄なんか／はくんじゃないぞ」という父親の言葉に「［　　　Ⅱ　　　］」と言う「ミミコ」の理屈が、いかにもきかん気の子供の理屈らしくて愉快である。そんな一人前の理屈をこねながら、「ミミコ」は「小さなそのあんよで」、彼女にとっては「［　　Ⅲ　　］」に大きなはずの父親の「下駄をひきずって行った」。その下駄は「ミミコ」には大きすぎるので、はくことができず、ひきずって行かざるを得なかったのだが、そうした「ミミコ」のいっぱしの口のききようと振る舞いとに、詩人は幼い彼女の独立心を見たのである。彼女は、そして、土間の片隅のかますの上にある自分の下駄のところへと行く。かますの上に、赤い鼻緒の小さな赤い下駄が、かぼちゃと並んでちょこんと載っているところがたいへんらしく、の前にその場面があざやかに浮かんでくる。その赤い鼻緒の小さな下駄が表しているように、彼女は何と言ってもまだ小さな女の子なのである。この時の「ミミコ」の年齢は、四、五歳前後と推定される。　 （の文による）

＊語注

＊かんこ…下駄の幼児語。

＊かます…むしろを二つ折りにして袋状にしたもの。塩・穀物などを入れる。

＊疎開…戦災などの被害を少なくするために、都市から地方へ移り住むこと。

問１　――線部①について、「その場」を具体的に説明せよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問２　――線部②の「赤い」はどんな感じを表現するためのことばか。最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　あでやかさ　　イ　かわいらしさ　　ウ　素朴さ

問３　［　］Ⅰに入る、連続する二行を詩中から抜き出し、行番号で答えよ。

（　　　）（　　　）

問４　［　］Ⅱに入る、「ミミコ」の会話部分を詩中から抜き出し、最初と最後の七字ずつを答えよ。

▽最初＝〔　　　　　 　　　　　　　〕

▽最後＝〔　　　　　 　　 　　　〕

問５　［　］Ⅲに入る、比喩を詩中から抜き出して答えよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　上の詩を二段に分けるとすれば、後段はどこから始まるか。行番号で答えよ。

（　　　）

問７　題名の「ミミコの独立」は、次のうちのどの事柄を指しているか。最も適当なものを選び、記号を○で囲め。

ア　ミミコがいっぱしの理屈を言うようになったこと。

イ　ミミコがとにかく歩けるようになったこと。

ウ　ミミコが何にでも口答えをするようになったこと。

【解答】

問１（例）ミミコがとうちゃんの下駄をはいている現場。

問２　イ

問３　12・13

問４　▽最初＝とうちゃんのな

　　　▽最後＝かんこはくんだ

問５　まな板みたい

問６　12

問７　ア

ポイント

問５　「とうちゃんの下駄」は、ミミコの「小さなそのあんよ」には、「まな板みたい」に大きい。

問６　「理屈をこねてみせながら」、ミミコが下駄をひきずっていくまでが前半。彼女がはくはずの「赤い鼻緒の／赤いかんこ」の描写が後半。